



# 北澤豪さん 国づくりの勢いを感じる in 東ティモール

独立後の  
国づくりを支える

21 世紀最初の独立国、東ティモール。日本人にも人気の観光地、バリ島から飛行機で2時間ほどのところに浮かぶこの国の面積は、わずかに1万5000平方キロメートル。東京、千葉、神奈川、埼玉を合わせたほどの大きさの小国だ。

「独立前も後も、みんな大変な思いをしてきたはずなのに明るい。前向きでいいね」。真っ青な空の下、そう話すのはサッカー解説者の北澤豪さん。JICA Aオフィシャルサポーターとして、これまで訪れた国は14カ国。2013年、

最初の訪問国として選んだのは、2002年に独立を果たした東ティモール。この国の歩みを自身の目で確かめるべく、現地に向かった。

今から約10年前、ポルトガルやインドネシアなどによる占領の時代が終わり、人々は未来への明るい光が差し始めたと思った。しかしこの国が直面したのはインフラの不足。長年の紛争で町は荒廃し、人々の生活を支える設備・サービスがほとんど機能していない状態だった。

北澤さんが最初に訪れたのが、国の玄関口の首都ディリ。生活物資の85%

を海外に依存している東ティモールにとって、ディリ港は「生命線」だ。そこで日本は06年、紛争により老朽化が進んでいた港の改修を開始。物流コストの低減や安全性の向上、輸出入量の増加が目的だった。貨物の積み下ろしに立ち会った北澤さんは、「今の設備で大型船舶も十分利用できる?」「1日にどのくらい輸入できる?」などと質問を投げかけていた。

また、市内の浄水施設では「日本の支援で住民が水を利用できるようにしたのは素晴らしい」と喜びながらも、市民からの料金徴収システムが整備されていないことを聞き、「利用者者が水の大切さを自覚できるようにしなければ」と問題点を指摘していた。

## 草の根に届く ニッポンの力

東ティモールでは、青年海外協力隊の活動も光った。この国の多くの人の生活を支えているのが農業。いかに付加価値を付けて「売れる」ものを作るか。この課題に住民と共に立ち向かっているのが鈴木哲史隊員。東ティモールの特産品の一つ、ココナツを使った加工品作りに取り組んでいる。

その一つがバージンココナツオイルだ。早速、その製造現場に足を運んだ北澤さん。

日本の協力で整備されたディリ港を視察する北澤さん



バージンココナツオイルの製造は、村の人たちが協力して取り組む

ちようど住民たちが、ココナツの実からオイルを抽出しているところだった。細かいごみは一つ一つ取り除いていく。すべて手作業だ。「こんなに手間をかけているなんて。きつとおいしいものができるね!」と驚きの様子。1瓶3ドルで販売していると聞き、「もっと値上げしてもよいのでは」とアドバイス。日本でもココナツオイルは健康ブームで人気が高い。北澤さんもお土産にとたくさん購入していた。

また、NPO法人東ティモール医療友の会（AFMET）も、JICA A草の根技術協力事業を通じてココナツを使った加工品作りに取り組む。AFMETのモットーは「あげない、教えない、無理強いしない」。海外からの支援に頼らず、住民たちが自らの力で病気への適切な対応・予防ができるようになるこ

とを目指している。

そんなAFMETが力を入れているのが、手洗いの習慣の普及だ。そのきっかけの一つとして導入しているのがココナツオイルを使ったせっけん作り。北澤さんが訪れた日も、村の女性たちは作業の真ん中で、皮膚病予防にも効果てきめんで、すでに住民たちからも重宝されているのだとか。「地元の人たちの生計向上にもつながり、健康にもいい。一石二鳥ですね」と北澤さんは感心していた。

最後は、北澤さんの途上国訪問では恒例のサッカー教室。まだ決して裕福とはいえない東ティモールだが、ボールをける子どもたちの姿は生き生きと輝いていた。国づくりの土台をしっかりと築き、一歩一歩着実に進んでほしい。そう強く感じた旅だった。



地元の子どもたちとサッカーに汗を流す北澤さん



地元の人たちと一緒に田植えに挑戦!

長年の紛争を経て、2002年に独立を果たした東ティモール。新たな国づくりがスタートして10年。次のステップへと歩を進めるこの国をJICAオフィシャルサポーターの北澤豪さんが訪れた。